古　漢　語　正　読　法

――漢詩文の誤読批正を通して――

松　尾　善　弘

―― 目　次 ――

はじめに
Ⅰ.1　「復照青苔上」の訓みと解釈
Ⅰ.2　「喜嫖姚／応正爾」はどう訓むべきか
Ⅱ.1　杜甫「江村／江亭」の問題点
Ⅱ.2　柳宗元「漁翁」の解釈と鑑賞
Ⅲ.1　「射不主皮」はどう訳すべきか
Ⅲ.2　「奚其為為政」の解釈
Ⅲ.3　「吾不与祭如不祭」の文構造
おわりに
（注）

はじめに

今を去る40年ほども前、漢文教育研究会で、盧僎「南楼望」の解釈をめぐって議論が紛糾したことがあった。(1) 3句目「江上客」が、A作者自身をさす、B作者の目にする旅人をさすとする解釈の対立である。結局、両説とも解釈可能ということで結論は出ずじまいだったが、爾来、筆者はこの奇妙な状況をどう考えればよいかを研究対象にすることを心密かに定めたのであった。

10年ほど前、この問題に対する一定の回答を呈示した。(2) その時の判断基準は、①語義の解釈――その際、語源を重視すること、②語音を点検し基本平仄式に照合して検証することの二つの観点を主軸とするものであった。今回、改めて、③語法の観点、即ち古漢語語法基本六型(3)に立脚した句構造分析法を呈示した。この三観点から、この詩の場合、A説が是であることの考証を進めてみたい。この三観点は本論文全体を一貫した基調となる。

松浦友久編『唐詩解釈辞典』(4)（以下『辞典』）は厖大な資料を調査収集し解釈の異同を要領よくまとめて解説した便利且つ重宝な書である。ただ、ややもすれば従来の訓読の世界での議論

に終始して科学的な観点をおき忘れ、自家撞着に陥っている現象を目にするのは遺憾なことである。例えば本詩の通釈もB説に拠っているように。

Nánlóu Wàng　　Lú Xuǎn
南楼望／南楼よりの望(なが)め　　盧僕

qù guó Sānbā yuǎn,
1　去　国　三　巴　遠、　　国を去って三巴は遠く、

dēng lóu wànlǐ chūn.
2　登　楼　万　里　春。　　楼に登れば万里春なり。

shāngxīn jiāngshàng kè,
3　傷　心　江　上　客、　　傷心たり江上の客、

búshì gùxiāng rén.
4　不　是　故　郷　人。　　是れ故郷の人ならず。

［詩形］五言絶句

［押韻］春、人が上平声11真の韻

［平仄式］［仄起り仄終り］型（以下［仄－仄］型）

1　●●○○●　　二四不同（二六対）の規則に合致。

2　○○●●◎　　反法、平声押韻の規則に合致。

3　○○○●●　　粘法に合致。3句末字は必ず仄声字。

4　●●●○◎　　反法に合致。孤平、孤仄、下三連（平／仄）なし。

平仄上は［仄－仄］基本型に1字も違背する個所のない完璧な作品である。

1・2句は①平仄上、反法に則り正反対。②語義上③語法上も、去V－国O／登V－楼O、三巴S－遠AP／万里S－春AP（A＝形容詞）ときれいな対をなす。つまり、近体詩の対句三条件を完全に満たす見事な作品である。因みに古体詩作品の対句は上記①平仄の条件を考慮しないで作ってあるため、見た目には往往にして近体詩作品より流麗に出来ているのである。言い換えると、平仄の条件を加味して作詩することが、詩人たちにとってどれほど負担になったか、推して知るべきなのである。

1・2句前半の主語（我S）は判りきったことなので省くのが漢詩文の‘常識’である。つまり元形は漢語の最もポピュラーな［(我S)－V－O］構造であり、それに［S－AP（形容詞述語構造)］を接合して作られた句になっている。

3傷心（A）→江上客（N）は、もと［江上客S－傷心P］を平仄の都合等を含めて転倒させたものである。大切なことは「江上客」が4句〈不〉是故郷人と一体となって名詞述語文［A是B］を構成していることである。記号化すれば、「江上客A≠故郷人B］となるわけだ。

「江上客」が仮に作者以外の他人であるとした場合、作者はどのようにしてその人が「客」即

ち旅人であることを見わけたのであろうか。かつ又その人が単なる「ションボリ」以上の「傷心」たる心理状態にあることをどのようにして見抜いたのであろうか。何よりもその旅人が同郷の人である或いはないとはどのような姿形から判断できることなのか。なにか目印でもあり、多くの人々の中から特定する方法を知っているとでも言うのであろうか。

これらすべての疑問に対し、B説は何一つ確たる証拠をあげて答えることはできない。逆にA説であれば上記すべての疑問に即座に且つ明瞭に答えることができる。「春愁」や「しょげ返っている」どころではない「落ち込んだ気持ち（傷心）」は、自分の心境であるからこそ率直に表現できるのであり、他人の深層心理を見透かすのは至難の業である。また、自分は左遷されてこの三巴の地に赴任した人間だから根っからの土地っ子（故郷人）ではない。[江上客（我）是（＝）他郷人] となるわけだ。

B説は恐らく4句を「是レ故郷ノ人ナラズ」と訓読したため、「是」を判断詞としてではなく指示代名詞「此」と錯覚し、「此の（その）旅人は故郷（同郷）の人ではない」と限りなくズレていって、恰も作者が目にしている他人の描写句であると錯覚するところまで辿り着いてしまったのではなかろうか。

本詩のように、自己存在を客体化して恰も別人であるかの如くに描写表現する技に長けた唐詩作品に対し、わが国の多くの漢学者（おもしろいことにかなりの中国人学者も含めて）はその真相を理解することにむしろ不得意であることを、以下のいくつかの唐詩解釈作業の中で発見することになろう。

Ⅰ.1　「復照青苔上」の訓みと解釈

訓読法が、過去、我が国における漢文化普及に多大の貢献を果たした事実は万人の認めるところである。しかし、反面、それが漢文化を一面的に或いは歪めて紹介した事実も認めるに吝かであってはならないであろう。

一体、片言の漢語も話せぬ日本人が、なぜ紀元前数世紀に書かれた古漢語文献を、人によっては苦もなく読み解くことができるのかと言えば、それは、古漢語を疑似日本古文に変換する技術・訓読法があったからであり、その即時変換を可能にする仲介者・漢字があったからである。つまり、漢籍が漢字で表記されているため、基本的ないくつかの漢字を識っている日本人はそのことを最大限活用して、古漢語を主として目で見て読み解く方法、半翻訳術を創り出したのである。かくして、日本古典文法をある程度弁えた日本人なら誰でも返り点等の手ほどきを受けた後、先達のつけた送り仮名をなぞって変装した古漢語＝漢文を読み解くようになったという次第である。

だが、ここで忘れてならないのは、訓読法にどれほど熟達しても、決して原漢文＝古漢語を個

人が独力で読めるようにはならないことである。更に悪いことには、いったん誤読された古漢語は、余程のことがない限り、未来永劫にわたって訂正される保証がないことだ。たとえ誤読に気付いたとしても、上述したように、徒らに同じ訓読の世界で堂々めぐりするばかりで解決の糸口が見出せない状態に陥ってしまうのだ。

より速く、より正確に古文献を読み解き、古代文化を吸収することが要求される21世紀に当たって、では、時代の流れに即応した古漢語学習法はどのようなものであるべきなのだろうか。

Lùchái　　Wáng Wéi
鹿　柴／鹿柴(がこ)い　　王　維

kōngshān bú jiàn rén,
1　空　山　不　見　人、　　空山　人を見ず、

dàn wén rényǔ xiǎng.
2　但　聞　人　語　響。　　但だ人語の響くを聞くのみ。

fǎnjǐng rù shēnlín,
3　返　景　入　深　林、　　返景　深林に入り、

fù　zhào　qīngtáishàng.
4　復　照　青　苔　上。　　復(ま)た青苔の上を照らす。

［詩形］五言古絶句

［押韻］響・上が上声12養・去声23漾の韻

［平仄式］＊［平－平］型仄声押韻

1	○	○	●	●	○	cf.	○	○	●	●	○
2	●	○	○	●	◉		●	●	○	○	◉
3	●	●	●	○	○		●	●	●	○	○
4	●	●	○	○	◉		○	○	○	●	◉

詩形を古絶句と称するのは、①［近体詩は平声押韻］の原則に反し、仄声押韻となっている。②各句共［二四不同］は適っているが、反法・粘法を犯した拗体となっている（正しくはcfのパターンにすべき）からである。

「空山」は類義語「空院、空宇、空谷、空洞、空房、空林」が示唆する如く、「ガランとして人気のない山林」を言い、場所語である。「空山×／ニ／ニテ／ニシテ」等の送り仮名が考えられるが、いずれにしろ句構造上は前置詞（「於」が省かれた）句として主語と動詞の間に挟み込まれた形である。［(我S)〈(於)空山〉〈不〉見V－人O］　場所語が主題語S_2になりうるのは、次に来る動詞が存現動詞である場合であり、その動詞の後に来るのが主体語S_1となる。cf.＊［空山S_2－響V－人語S_1］

1句は極めてこの存現文構造に近い。なぜかと言えば、動詞「見」が存現動詞と見まがう語義を持つ動詞だからである。

①与可画竹時、見竹不見人。(蘇東坡「書晁補之ー」

②故人不可見、漢水日東流。(王維「哭孟浩然」)

③風吹草低見牛羊。(斛律金「敕勒歌」)

漢詩の中で「見」は普通①見える、see(↔look、看と対比)②会う、遇う③現れる(見現xiàn同じ)の三大義で使われている。

すると、「不見≒沒有/無」なる等式が成り立ち、1句は意味的に限りなく存現構造句に近づくことになるのだ。cf.＊[空山S_2ー無Vー人影S_1]

王維は鹿囲いのある森閑とした森陰に佇んで、決してあたりをキョロキョロ見回して誰も看(み)えないと言っているのではなく、目に映る範囲で人影がないと言っているのである。

だが、人影は目に入らぬが音のみぞする。全く無人の山林でない証拠には、どこからともなくボソボソと人の話し声が聞こえてくる。ここでも「聴」こうとして聞いているのではなく、自然に耳に伝わってきて聞こえると言っているのである。用語の隅々にまで込められた「静」の境、ひいては「禅」の境地に、我々は能う限り肉迫して全的理解に努めねばならない。

[〈但〉(我S)ー聞Vー人語響O]

「但」について小川環樹氏は、「ただそれだけ。(中略)現代語の但是の義に用いた例は唐詩に見ない」(5)と解説し、次の例語をあげる。

但恐天河落、寧辞酒盞空。(杜甫「酬孟雲卿」)

一方、『大漢和辞典』は「但」に、①ただ　②ただ、しかし、しかれども　③およそ、すべての解釈を与え、次の②の例詩をあげる。

②学書初学衛夫人、但恨無過王右軍。(杜甫「丹青引贈曹将軍覇」)

②不見籬下菊、但余墟中煙。(白居易「訪陶公旧宅」)

両者の食い違いはどうすれば解消できるか。それは「但」の使われている場所によって①ともなり、②ともなるということから解ける。つまり、原則として①は奇数句初字に用いられた時であり、②は偶数句初字に用いられた時の意味となる。

①但去莫復問、白雲無尽時。(王維「送別」)

このことは、漢詩が奇偶の2句をペアーとして作られるものだということからも説明できる。偶数句は普通、奇数句を'受けて'作られるものだからである。従って、4句構成詩の場合、我国で昔から「起承転結」なる語で説明するのは、あくまで意味上からの捉え方であり、音的要素も含めた捉え方ではないことが分かる。

但し、下例のように「但」が偶数句に使われていても、'接続'の意味は極めて薄いものもありうる。

不知江月照何人、但見長江送流。(張若虚「春江華月夜」)

cf.孤帆遠影碧空尽、唯見長江天際流。(李白「黄鶴楼送孟浩然之広陵」)

もちろん、‘平仄’問題も絡んでいること言うまでもない。

3・4句は連動式構造句である。[返景S－入V－深林O／〈復〉照V－青苔上O]　もし、未字の「上」を‘shàng’と読んで動詞とみなせば、3・4句は三つの動詞でなる連動式句となる。[返景S－入V－深林O／〈復〉照V－青苔O／－上V]

押韻の関連で言えば、「上」は上声で読む方が良い。しかし、この場合、必ずしもそれに拘束されず、去声に読んでも一向に構わないのだ。造句上も「上」を動詞にみたてることは可能である。しかし、そうすると上に見る通り、構造上ギクシャクしており、意味上もいかにも忙しない。単純素朴に「静」的且つ「禅」的詩境を汲み取るのに果たしてどちらの解釈を採るのがベターだろうか。

〈復〉は2度以上起る動作や事象を結ぶ、連詞／副詞である。原義「反復」が示すように「重ねて、又、再」の類義語で説明される(『大』)。

独坐幽篁裏、弾琴復長嘯。(王維「竹裏館」)

已見寒梅発、復聞啼鳥声。(〃「雑語」)

不妨飲酒復垂釣、君但能来相往還。(〃「答張五弟」)

両人独酌山花開、一杯一杯復一杯。(李白「山中与幽人対酌」)

独酌復独詠、不覚月平西。(白楽天「東坡種花」)

cf.今日又明日、自知心不閑。(王維「留別邱為」)

さて、渡部英喜氏(以下W氏)はその著[6]で、本詩結句を「復た照らして青苔に上る」と訓み、「夕日の光、深い林に差し込んで、青い苔の上にのぼりくる」と意訳している。この訓み下しから無理を承知で復原句を作れば次のようになるだろうか。＊[返景入深林、復照(而)上shàng青苔上shàng。？？？]

筆者は浅学菲才の身であるにも拘わらず長い学究生活を忝けなくさせてもらっているが、かつてこれほどの乱訓暴読現象を見たことがなかった。翻って、このような無手勝流が臆面もなく罷り通る漢文訓読の世界とは一体何なのかという深い疑惑の念が頭を抬げ、憤りを抑えることができない。

Ⅰ.2　「喜嫖姚／応正爾」はどう訓むべきか

W氏はその著[7]で、蘇轍「春日寄内」を次のように訓み下し、解説を加えている。(下線部はこれから検討する箇所であることを示す)

春日寄内／春日内(つま)に寄す　蘇轍

1	春到燕山氷亦消、	春は燕山に到り氷亦た消ゆ
2	帰駿迎日喜嫖姚。	帰駿日を迎えて嫖姚(ひょうよう)を喜ぶ
3	久行胡地生華髪、	久しく胡地を行き華髪を生じ
4	初試東風脱幣貂。	初めて試みる東風に幣貂(へいてん)を脱ぐを
5	挿髻小幡応正爾、	髻に挿す小幡応(まさ)に正(まさ)に爾(しか)るべし
6	点槃生菜為誰挑。	槃に点ずる生菜誰が為にか挑(えら)ばん
7	付書勤掃東園雪、	書に付して勤めて掃け東園の雪
8	到日青梅未満条。	到る日青梅未だ条(えだ)に満たざらん

[詩形] 七言律詩

[押韻] 消、姚、貂、挑、条が下平声2蕭の韻

[平仄式] [仄－平] 型

1	○●●○○●◎ (●)　(○)　(●)	1・3字目を互いに逆にして救拯 5字目逆になったため孤仄を犯す
2	○○○●●○◎ (●)	3字目逆にして救拯せず
3	●○○●○○● (○)　(●)	1・3字目互いに逆にして救拯
4	○●○○●●◎ (●)	1字目逆にして救拯せず
5	●●●○○●● (○)	3字目　〃　〃
6	●○○●●○◎ (○)　(●)	1・3字目逆にして救拯
7	●○○●○○● (○)　(●)	〃　〃
8	●●○○●●◎	基本型通り

1・2・4・5句に小疵あり、ためにトータルすると平：仄＝30：26となる。到、日、生、東の重字があり、用字上はせいぜい‘佳作’というべきか。

1句［春S－到V－燕山O／氷S－〈亦〉消VP］は「氷も亦(また)消ゆ」と訓むべきである。前章

で見たように〈復〉は同じような動作・事象のくり返しを言う時の接続詞であった。［返景－入〈復〉照－］［弾琴〈復〉長嘯］［一杯〈復〉一杯］　並列の接続助字と称されるこの〈モ亦〉も、二つ以上の類似の動作や事象を並記する役目を持つ。

古人不往亦不滅、我今不作亦不止。（蘇東坡「戯書」）

ただ、この〈亦〉は片一方の動作・事象のみを書いて、書かれていないもう一つのそれを読者に連想させることを得意とする助字でもある。つまり、［氷亦消］は春が燕山にやって来て氷も‘また’消えたのではなく、――そうであれば‘また’は加上〈又〉で代替できる――厳冬の他の種々の現象、つまり、雪が消えたり、北風が吹き息んだりを読者に想起させる働きをもつ〈亦〉なのである。

２句の［喜Ａ・嫖姚Ｃ（補語）］は「喜ぶこと嫖姚たり（ピョンピョコ跳びはねている）」と訓まねばならない。例えば、［語Ｖ・依依Ｃ］も「語ること依依たり（ねんごろに語り合った）」と訓むべきで、「依依を語る」などとは絶対に訓めないのである。［形／動・補語Ｃ］の構造だから。

田夫荷鋤立、相見語依依。（王維「渭川田家」）

青山隠隠水迢迢、秋尽江南草未凋。（杜牧「寄楊州韓綽判官」）

無辺落木蕭蕭下、不尽長江滾滾来。（杜甫「登高」）

これに対し、［青山Ｓ－隠隠AP／水Ｓ－迢迢AP］は形容詞述語構造句であり、［落木Ｓ－下VP／長江Ｓ－来VP］の動詞述語構造句中の〈蕭蕭〉〈滾滾〉は〈状語（副詞的修飾語）〉である（動詞を修飾する）。

３句は、「（頭が）華髪を生じた」と［（Ｓ）－Ｖ－Ｏ］構造にとるべきではなく、「（頭に）華髪が生じた」［（S_2）－Ｖ－S_1］と存現文構造で捉えるべきである。

５・６句は対句であるが、後半３字は意味と平仄の関係上、語法的に少々ねじれ現象がある。

応　正　爾［助動詞・Ｖ－爾Ｏ］

為　誰　挑［〈介詞・誰〉－Ｖ］

訓読すれば、「応（まさ）に爾（なんじ）を（端）正（ただ）（に）すべし」／「誰が為にか挑ばん」となる。W氏が律詩作品の基本事項である「３・４句と５・６句は対句にして作る」を識らず（又は忘却し）、「応に正に爾るべし」などと奇妙きてれつな訓みをして口を拭っている様をどう考えればよいだろうか。

訓読法が訓読法として成り立つ基本条件は、最初に訓読する者が古漢語の原意を限りなく正確に日本古文に翻訳する術に長けていなければならぬことである。訓読法は自らの持つ本性のため、一旦誤読されてしまうと、仲々それを発見できず、発見しても訂正する術を知らない。そのように考えると、古漢語読解法は、結局、一見遠回りのようでも、漢語を漢語として、古漢語を古漢語として正攻法で読解する方が早道であり、且つ必ず真理に到達できる学習法と言えるのではないだろうか。

些細な問題であるが、7句の「付書」も、「書に付して」と読めば、「書」は手紙のことだろうが、「書に付して勤めて掃け」とは一体何のことなのか、考えると分からなくなる。恐らく読者も曖昧模糊とした中で何となく分かったつもりになっているに過ぎないのではないか。訓読法の欠陥現象として‘付書’（付記）しておこう。

Ⅱ.1　杜甫「江村／江亭」の問題点

杜甫「江村」の「相親相近水中鷗」を解釈して中野孝次氏（以下N氏）は次のように言う。[8]
「水の中の鷗はわれわれを恐れもせず人に親しんで近寄ってくる」

『続辞典』は、本句には、A（鷗が）私に対して親しみ近づく、B鷗がお互いに親しみ近づき合っているの2説があることを紹介し、A説に与した通釈を記している。

しかし、これは構句法上からみても、現実的に考えても奇妙なことではあるまいか。この詩も対句の三条件と照合して誤解の原因を探り、現実との整合性を図りつつ正解を目ざしてみよう。

Jiāngcūn　Dù Fǔ
江　村　　杜　甫

qīngjiāng yìqū bào cūn liú、
1　清　江　一　曲　抱　村　流、　　清江一曲　村を抱いて流れ、

chángxià jiāngcūn shìshì yōu.
2　長　夏　江　村　事　事　幽。　　長夏　江村　事事幽なり。

zì qù zì lái liángshàng yàn,
3　自　去　自　来　梁　上　燕、　　自ら去り自ら来る梁上の燕、

xiāng qīn xiāng jìn shuǐzhōng ōu.
4　相　親　相　近　水　中　鷗。　　相親しみ相近づく水中の鷗。

lǎoqī huà zhǐ wéi qíjú、
5　老　妻　画　紙　為　棊　局、　　老妻は紙に画きて棊局を為(つく)り、

zhìzǐ qiāo zhēn zuò diàogōu.
6　稚　子　敲　針　作　釣　鈎。　　稚子は針を敲(たた)きて釣鈎を作る。

duōbìng suǒ xū wéi yàowù、
7 多 病 所 須 唯 薬 物、　　多病須(ま)つ所は唯(だ)薬物、
dàn yǒu gùrén gōng lùmǐ.
（一作 但 有 故 人 供 禄 米、　　但だ故人の禄米を供するあり）

wēiqū cǐwài gèng hé qiú.
8 微 躯 此 外 更 何 求。　　微躯此の外に更に何をか求めん。

［詩形］七言律詩

［押韻］流、幽、鴎、鈎、求が下平11尤の韻

［平仄式］［平－平］型

1 ○○●●●○◎
2 ○●○○●●◎　　1字目仄を平に作り救拯せず
(●)
3 ●●●○○●●　　3・4句3字目を互いに逆にして救拯
(○)
4 ○○○●●○◎　　（2句で救拯）
(●)
5 ●○●●○○●　　1字目平を仄にして救拯せず
(○)
6 ●●○○●●◎
7 ○●●○○●●　　1・3字目互いに逆にし1句内救拯
(●)　(○)
（一作●●●○○●●　　3字目平を仄に作り救拯せず）
(○)
8 ○○●●●○◎

2・4句1字目が基本型に違(たが)うが、全句をトータルすると平：仄＝28：28に戻っている。7句は平仄上は一作がやや劣るものの、造句上はむしろ杜甫らしさが感じられ（後述）、意味的にも明るく親しみがある。

3・4句を語法的に照合すれば、4句の解釈はB説が妥当であること一目瞭然である。

3'［〈梁上〉燕S－〈自〉去V〈自〉来V'］動詞述語句

4'［〈水中〉鴎S－〈相〉親V〈相〉近V'］　　〃

3・4句はもと3'・4'句を恐らく平仄式との関係で転倒させたものであろう。「勝手きままに去来する」のが「梁上の燕」であると同様、「親しみ近づき合う」のは「水中の鴎たち」である。「相」は複数の鴎が「互いに」睦み合って泳いでいる様子を客観的に描写した助字であって、作者やまして見知らぬ通行人を「対象」として近づいてくる意味を示唆する助字ではないのである。

杜甫は草堂内に位置して周囲を見わたし、おだやかな江村風景、家族の日常の一コマ、小動物

たちの自在な生きざまを闊達に描写している。比較的安定した生活の中で余裕の目すら感じさせる。ところがA説をとると、杜甫は4句目に到って突然のこのこと川べりにおり立ち、アヒルや鶏でさえない鴎（水鳥）と遊び戯れるという仕儀に相成る。幻想の世界を通り越して劇画化された世界になっていると言えないだろうか。

A説が罷り通ってきた原因には次の二点が考えられる。1.「相」の字義①互いに、②動作の対象があることを示す、のうち②をとったこと。2.注釈書にある『列子』黄帝篇の「海鴎」の寓話にまんまと乗せられてしまったことである。

先達の折角の研究成果があっても、かかる単純な解釈の場で適用を間違えるようであってはなるまい。また、「機心」をテーマとしたファンタジックな寓話の世界と短絡し、リアリスト杜甫を餌付けの好々爺に仕立てあげてはなるまい。原文を自分の頭で読み解くのが第一義であって、不用意に諸注にとびつくと振り回される結果になる好例である。それにしても、漢詩文読解にはなぜこのような単純ミスがつきまとうのであろうか。

Jiāngtíng　　Dù Fǔ
江　亭　　杜　甫

tǎnfù jiāngtíng nuǎn,
1　坦　腹　江　亭　暖、　　坦腹すれば江亭暖かに、

chángyín yěwàng shí.
2　長　吟　野　望　時。　　長吟す　野望の時。

shuǐ liú xīn bú jìng
3　水　流　心　不　競、　　水は流れて心競はず、

yún zài yì jū chí.
4　雲　在　意　倶　遅。　　雲在りて　意倶に遅し。

jìjì chūn jiāng wǎn,
5　寂　寂　春　将　晩、　　寂寂として春は将に晩れんとし、

xīn xīn wù zì sī.
6　欣　欣　物　自　私。　　欣欣として　物自ら私す。

gùlín guī wèi dé,
7　故　林　帰　未　得、　　故林　帰ること未だ得ず、

pái mèn qiǎng cái shī.
8　排　悶　強　裁　詩。　　悶を排して強ひて詩を裁す。

［詩形］五言律詩

［押韻］時、遅、私、詩が上平４支の韻

［平仄式］［仄－仄］型

1　●●○○●
2　○○●●◎
3　●○○●●
　(○)
4　○●●○◎　　３・４句第１字互いに逆にして救拯
　(●)
5　●●○○●
6　○○●●◎
7　●○○●●
　(○)
8　○●●○◉　　７・８句第１字互いに逆にして救拯
　(●)

平仄式は基本型よりむしろこの作品の方が‘完整美’を表わしていると言える（３・４、７・８の第１字目）。

１句は普通、「坦腹す　江亭の暖かなるに」又は「坦腹すれば江亭暖かなり」と訓読される。この句構造は兼語式であり［(我Ｓ)－坦腹Ｖ－江亭O/S－暖AP］、この構造に沿って訓読すれば、「江亭に坦腹すれば、江亭暖かなり」となる。つまり、「江亭」が前半の目的語と後半の主語を兼ねた凝縮した構造になっているのである。

「江村」の７句一作もこの兼語式句であった。［〈但〉有Ｖ－故人S_1/S－供（分）Ｖ－禄米O］杜甫らしさを象徴する‘緻密な凝縮された’句と先述した所以である。

ここで、この特徴を王維、李白の造句法と比較しつつ更に追求してみよう。（『辞典』P425を参考にする）

江流天地外、○○○●●　　［江流Ｓ－天地外NP］
山色有無中。○●●○◎　　［山色Ｓ－有無中NP］
　(●)
（王維「漢江臨汎」）

山随平野尽、○○○●●　　［山Ｓ－随Ｖ－平野Ｏ－尽Ｖ］
江入大荒流。●●●○◎　　［江Ｓ－入Ｖ－大荒Ｏ－流Ｖ］
　(●)
（李白「渡荊門送別」）

星垂平野闊、○○○●●　　［星Ｓ－垂Ｖ－平野O/S－闊AP］
月湧大江流。●●●○◎　　［月Ｓ－湧Ｖ－大江O/S－流AP］
（杜甫「旅夜書懐」）

杜甫が詩聖の尊称に相応しい大詩人であったことは上の句一つをとりあげても納得しえよう。

王維の句は「静」の詩人の称号通り、直截簡明な名詞述語句である。李白の句も酒仙と呼ばれるに相応しい奔放流麗な連動式句構造であり、端的にその作風を象徴している。

杜甫の句は、見る如く兼語式構造句で、錦織のように圧縮されて重厚である。句意も一段と起伏に富み、しかも平明且つリアルである。平仄式に一点の瑕疵もなく、お見事の一語に尽きる。

本詩の3句目をN氏が「水流不心競」と書いているため、[9] 初読した筆者はしばらくの間キリキリ舞いさせられる破目となった。旅次の車中にあって、この句を目にした時、おかしい、3・4句は対句のはずだから、「不心競」ではなくて「心不競」のはずだと一瞬思った。しかし、次の瞬間、待てよ、これほど初歩的基本的な誰にでも判る誤植を、N氏ほどもあろうお方が見逃す筈がないと思い直した。それが運の尽きで、帰宅して「心不競」の原文を目にするまで、「不心競」の正当性を証明しようと乏しい知識をふり絞ったのである。その方法は二つあった。一つは平仄上の正当性。二つ目は語法上の正当性である。

後半が「不心競」であった場合、3句の平仄式は「●○●○●」となる。二四不同の大原則を犯しているのであるが、実はこの基本型「○○○●●」は特にこれが転句に用いられた時、特殊型として「○○●○●」になる現象が頻繁に起こるのである。何故そうなるのか、その理由を筆者は未だ究明していないが、例えばこの［平ー仄］型基本型は特殊型に変型して初句にも用いられたりする。

昔聞洞庭水、● ○ ● ○ ●、

今上岳陽楼。○ ● ● ○ ◎。（杜甫「登岳陽楼」）

そこで、この場合も、この特殊型を運用して作ったのだと思うことで第一の関門は突破できたと錯覚したわけだ。

二つ目の関門は、まず末字が仄字になるということから始まる。即ち、「心不競／心競はず」は「不競心／心を競はせず」という並べ方も出来る。末字を仄にするため入れ代えて――勿論、この程度の入れ代えは普通の読者にとってすぐ察しのつくところであるから――「心」という名詞の前に副詞「不」をつけて、――これも普通の読者には‘奇異’なことがすぐ判るわけだから、それを逆用して――敢えて「不心競」という読者に阿(おもね)った表現をとったのであろうと‘解釈’したのである。

帰宅直後、これらの詮索が‘徒労’であったことを思い知らされたのであるが、もとはと言えば、N氏の‘単純ミス’に端を発してのことである。

翻って、ではN氏はこれほどの単純ミスに気が付かなかったのであろうか、それともこれが誤植であることに気付くべくもなく、訓読された本から書き写す際に生じた無意識下のミス、つまり自分の頭で原句を読み解いた結果でない証拠ではないのかという疑惑が生ずるのを禁じ得ないのである。幸いにも日本語訳は間違っていない。しかし、「不心競」が漢語として成り立たない

という真理を認識することは厳重である。訓読法がまやかしであることの証明がここでできる。重箱の隅をほじくっているなどと言って看過できる問題では決してないのだ。

5・6句は、もと［春S－寂寂AP／物S――欣欣AP］という形容詞述語句の述語を前置してそのまま形容詞として使い、［〈寂寂〉春S――〈将〉晩VP］［〈欣欣〉物S――自私VP］という動詞（or形容詞）述語句となったものである。因みに、渭城朝雨浥軽塵、客舎青青柳色新。（王維「送元二使安西」）は［客舎S－青青AP／柳色S－新AP］という形容詞述語句の重なった形であり、「客舎は（周囲に柳が繁茂して）青青としており、その柳が朝方降った雨のためすっかり洗われて新鮮である」という句意になるのである。

「おわりに」の「故郷今夜思千里」の分析に資するため付言しておこう。7句の「故林」は明らかに作者が「未だ帰ることのできない」ふるさとのことであって、句法上は目的語が前置されたものである。「故林」が主語となって、帰ったり帰れなかったりすることは絶対にあり得ないことである。ついでに「帰未得」は、「そういうことがあり得る」という義の補語「得」との間に否定の副詞「未」を投げ込んだ補語構造句である。

Ⅱ.2　柳宗元「漁翁」の解釈と鑑賞

柳宗元は自己の内面を深く省察し摘出して、恰も他人の目で見ているかの如く客観的に自己の置かれている状況を描写する術に長けた詩人である。自己を客体化し凝視することは、自己否定の否定に繋がり、反問する自己を他人の目で眺めることは、自己の内部で対立と統一の闘争を繰り返す矛盾の存在に気付いていることを意味する。

「江雪」はまさにその弁証法的唯物論思考を端的に表出した作品と言えるだろう。千山に鳥の飛ぶことなく、万径に人跡も絶えた厳冬の環境の中、繁華な都を偲びつつ謫居生活に耐える悲愴なまでの孤独感を暗々裏に滲み出させて万人の共感を呼ぶ。独り寒江の雪に釣る箕笠着けた‘漁翁’の姿は一幅の山水画となって、誰かに描かれるまでもなくすべての読者の脳裏にすぐさまイメージされるのだ。そしてその時、読者の目と作者の目は一体となる。

「漁翁」の手法もこれと同一線上にある。初句の「漁翁」とは作者自身のことであり、例えていえば作者に取り憑いた「霊」の目が、対岸から「漁翁」の姿をみつめており、その行動を逐一観察して客観描写したのが初二句なのである。日中の多くの学者がこの手法を見抜けず、「霊」の目に幻惑されて虚実を取り違え、そのまま別人の「漁翁」としてしまうため、解釈上、前半4句と5・6句の主語の乖離が生じてしまうのである。

そこで、全句を通じて主語を一貫させるためには、初手から作者自身の目を主軸に据えて解釈する外はない。

「漁翁すなわち私は、夜になったので舟航の危険を避け、西巌に沿って舟泊りすることにした。夜明けと友に湘川の清水を汲み、あたりの木片竹片を拾って朝餉の支度をした。

Yúwēng　Liǔ Zōngyuán
漁　翁　　柳宗元

yúwēng yè páng xīyán sù,
1　漁　翁　夜　傍　西　巌　宿、　　漁翁　夜　西巌に傍うて宿し、

xiǎo jí qīngxiāng rán Chǔzhú.
2　暁　汲　清　湘　然　楚　竹。　　暁　清湘に汲み楚竹を然やす。

yān xiāo rì chū bú jiàn rén,
3　煙　銷　日　出　不　見　人、　　煙銷え日出ずるも人を見ず、

ǎinǎi yīshēng shānshuǐ lǜ
4　欸　乃　一　声　山　水　緑。　　欸乃一声　山水緑なり。

huíkān tiānjì xià zhōngliú,
5　廻　看　天　際　下　中　流、　　天際を廻看して中流を下れば、

yánshàng wúxīn yún xiāng zhú.
6　巌　上　無　心　雲　相　逐。　　巌上無心　雲相い逐ふ。

［詩形］七言古詩
［押韻］宿、竹、緑（入声２沃）逐（入声１屋）の通押。

３句目は「不見人」の「人」の解釈がカギになる。「塵柴」で見たように、漢語で最もポピュラーな［（我Ｓ）－Ｖ－Ｏ］構造のこの句は限りなく存現構造句〔無人影（沒有人）〕に近く、「人」は不特定の‘他人’であった。

故人不可見、漢水日東流（王維「哭孟浩然」）

この場合、「不可見（会うことのできない）」相手は「故人」である。

此夜腸断人不見、夜行残月影徘徊。（顧況「聴笛思帰」）

この「人」は、この前の句に出てくる特定の「人」であるが、「その人」は「不見（夢に現れない）」という意味で使われている。

そうすると３句は、「川霧が消え、朝日も差してきてあたりは見通しがよくなったにも拘わらず、私の目で見て、他の人が見当らない」とするのが正解であろう。だが、この句も依然として「霊」の目で観察したものとして、「不見人」を「その人はいなくなった」と解釈できないとは言えない。当然、４句も、「欸乃の音を残して、その人は万緑の中を漕ぎ出して行ったようだ」と

「霊」の目で見た（耳で聞いた）解釈となる。

『辞典』は、４句の「欸乃」に、Ａ舟をこぐ櫓のきしる音、Ｂ舟をこぐ時のかけ声、Ｃ舟歌の説のあることを紹介し、執筆者はＡ説支持の通釈をしている。但し、最後に「漁翁の肉声であるＢＣ説も捨て難い」と述べているように、「欸乃」一声の主が作者である可能性もほのめかしている。

実はここにこの詩全体の主語を確定していくヒントが隠されている。ＡＢＣ説のどれが正解であるかを詮索することにかまけてしまうのでなく、それが一体誰の動作であり、作者自身がそれを陳述したものか、それとも「霊」の目が言わしめているのかの問題がつきつけられていると捉えねばならないのだ。

柳宗元の「渓居」詩が明白にその答えを出す。

1　久為簪組累、　　久しく簪組（しんそ）の累を為し、
2　幸此南夷謫、　　幸いに此（ここ）に南夷に謫せらる。
3　閑依農圃鄰、　　閑（ひま）には農圃の隣に依（した）しみ、
4　偶似山林客。　　偶たま山林の客に似たり。
5　暁耕翻露草、　　暁に耕せば露草翻り、
6　夜榜[10]響渓石。　夜に榜（こぎいだ）せば渓石響く。[11]
7　来往不逢人、　　来往するも人に逢はず、
8　長歌楚天碧。　　長歌すれば楚天碧なり。

この７・８句と「漁翁」の３・４句を並べると、五言と七言の違いはあるものの、詩想も句境も句構造もものの見事に重ね合わせることができる。

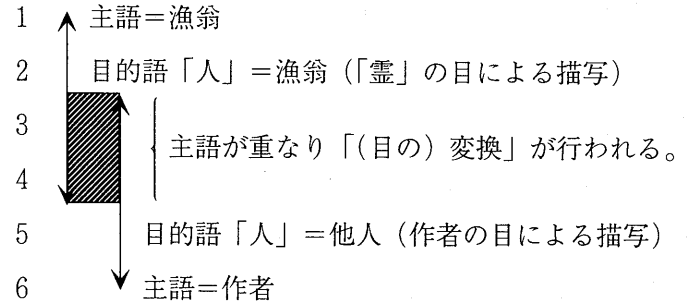
煙銷日出／往来　不見人／不逢人
欸乃一声／長歌　山水緑／楚天碧

靄が消え朝日が差し込んできたがあたりに人影が見えない／往来しても人に逢わない、という時の主語はいずれも作者自身である。同様に、万緑の中を舟歌を歌いつつ漕ぎ出す人も、紺碧の楚天のもと山歌を歌いつつ歩む人も、作者以外の何者でもない。

してみると、「漁翁」は全句を通して主語を作者にとる解釈[1]と、１～４句を「霊」の目による漁翁、３～６句を作者とする解釈[2]が成り立つことになる。つまり、３・４句は漁翁と作者の主語を兼ね備えており、そこで「変身」の術が施されていると考えることができるのである。

柳宗元のセンスの良さ、一筋縄ではいかぬ奥の手を垣間見る思いがする。

2解



かくして、従来の解釈１・２・３・４句の主語は漁翁、５・６句の主語は作者という乖離が見事に解消することになる。単純に1解をとるか、ひねった形の2解をとるかは勝手だが（根底においては同一だから）、自らの無理解を棚にあげて、５・６句は不必要だなどと暴論を吐くことは許されまい。[12]

残された問題、６句の解釈にとりかかろう。

多くの注釈書が（いま、『辞典』に代表させる）６句を次のように通釈し解説する。

――あの巌上を雲がいくつも無心に追いかけあうようにながれている。「相」は下の動詞に対象のあることを示す副詞。この雲はおそらく白雲であり、白雲は俗世を超脱した自由の境地の象徴として唐詩に頻見する。５・６句は陶淵明の「時矯首而遐観、雲無心而出岫……」を意識していると思われる。――

反論イ.「西巌」の「巌上」はどの程度の高さの断崖であろうか。断崖が高ければ高いほど視界が狭まるのは道理で、少なくとも遮るもののない沃野の上空とは同列には論じられない。そうすると、作者が舟上から振り返って看ることのできる「白雲」は、どれほどのおおきさで、いくつくらいあればその視野の中で追いかけっこができるだろうか。

ロ.「雲」は時に「白雲」を連想させ、人間がふだん見るのは「白雲」が多いが、「白雲は隠者を象徴し、隠逸の世界をうたっている」[13] ものであるというのであればあるほど、原則として「白雲」と明記されているのに限るべきである。

行到水窮処、坐看雲起時。（王維「終南別業」）

但去莫復問、白雲無尽時。（王維「送別」）

というのは、N氏などはこの‘見解’を更にエスカレートさせ、こともあろうに本詩に直結させて「こういう禅味のある、山水と人とが一つになった境地」[14] と現実主義者柳宗元をまるで正反対の観念論詩人に描くところまで行きつくからである。

ハ.「無心」に着目して「帰去来辞」を引き合いに出すなら、「頭をあげて（矯首）、はるかに眺めやる（遐観）」その時の姿態や距離感を考慮しないのは片手落ちである。柳宗元は両断崖の間の渓谷を、危険を避けて中流を漕ぎ下っている。ふと後ろをふり返ると、その断崖の上（天際）

すれすれに雲が流れているのが一瞬目にとまった。不安定な小船の上から瞬間的に雲を見る状態と、のどかな農村の郊外で遙かな上空を悠然と流れる白雲を長時間眺めている状態とを同列に論じられてはたまらない。

ニ．『辞典』は「相」を先述の②でとりながら、実際には①で訳すという自家撞着を起こしている。「逐」の基本義、「追うなり。走＋豚の略体との会意文字。狩と同じ動作。'放逐' はその派生義。放豚を追うが如し。周囲を囲んで追いつめること」[15] と併せ考えると、この場の状況は、両断岸に囲まれた中流を放豚（柳宗元）が雲に追いつめられるように漕ぎ下っているというのが実態に近いのではないか。王維の「明月来相照（我）」と同じく、「逐」する相手のあることを示す副詞「相」②は、「雲相逐（我）」でなければならない。

翻って、そういう心境に追いこむ「雲」は、無邪気とは言え、色をつければ限りなく灰色に近い雲ではなかろうか。すると、その延長線上にある作者の心境も、のんびりと行雲を眺める構図にはほど遠い、かなり緊張したリアルな雰囲気を漂わせていると解すべきであろう。少なくとも隠逸の世界や山水画風ロマンの世界或いは観念論的禅的世界に描き成すことなどとははっきり一線を画すべきだと考える。

前記「江村」の「鴎」の場合と同じく、ここでも後世の多くの注釈家たちが、単なる思い付きにすぎないある大家の注と不用意に結びつけて、机上の空論を展開する様をみてとることができるのである。

Ⅲ．1　「射不主皮」はどう訳すべきか

子曰、A射不主皮、B為力不同科、C古之道也（『論語』八佾）／子曰く、射は皮を主とせず、力を為すこと科を同じくせざるは、古の道なり。

本章句には［古注（馬融『十三経注疏』］と［新注（朱子『四書集注』］とで解釈に違いがある。どちらが正解と言えるか、語義と語法両面から攻めてみよう。

［古注］はＡＢを並列した一文とみなし、Ｃをまとめ文とする。［新注］はＢをＡの説明文とみ、Ｃをまとめ文とする。

［古注］Ａ馬曰、射有五善焉。一曰、和志体和。二曰、和容有容儀。三曰、主技能中質。四曰、和頌合雅頌。五曰、興武与舞同。天子三侯以熊虎豹皮為之。言射者、不但以中皮為善、亦兼取和容也。／射と言ふは、但だに皮に中るを以て善と為すのみならず、亦た兼ねて和容を取るなり。――（熊、虎、豹の皮を張りつけた）的に中（あた）ることを善しとするだけでなく、同時に和容（作法やカタの立派さ）を観るのである。

Ｂ馬曰、為力力役之事、亦有上中下、設三科焉。――夫役を課す際には上中下の三等級を設け

る。故曰、不同科。貧富并強弱無別而同為一科。孔子非之云、古之為力役不如今同科也。――孔子はこれを非難して云う。昔の力役は今のように貧富や強弱の差を無視して一律に課すようなことはなかった。

［新注］A・B為去声／為は去声――因為の為、接続詞とみなす。射不主皮、郷射礼文。為力不同科、孔子解礼之意如此也。皮、革也。布侯而棲革於其中、以為的。所謂鵠也。科、等也。古者射以観徳、但主於中、而不主於貫革。蓋以人之力有強弱不同等也。記（『私記』楽記篇）曰、王克商、散軍郊射、而貫革之射息。正謂此也。周衰私廃、列国兵争、復尚貫革。故孔子歎之。――Aは郷射の礼文、Bは孔子がその礼の意味をこのように解釈したものである。「皮」は布作りの侯の中に革を張りつけた的。いわゆる鵠のこと。

○楊氏曰、中可以学而能、力不可以強而至。聖人言古之道、所以正今之失。――中ることは学べばできるようになるが、力は強めればできるようになるものではない。聖人が古の道を言われたのは、現今の過失を正されるためである。

［現代漢語訳］孔子説「射不全皮」意思是説射箭只要的中箭鵠、不重在把皮射通。因為人的気力不同等、力大者可把皮射通、力小者只要射得中鵠。這是古人礼経文中一句「射不主皮」的本意。(16)

日中の現代語訳はほとんどが［新注］に則っている。両者の相違は先ず「皮（まと）」の構造の違いに始まる。［古注］は熊虎豹などの獣皮そのものを四角に張りつけたものを、［新注］は中に皮革を張りつけた布製の恐らく丸い的を考えている。［古注］はその的に中ることのみを評価の主要基準とするのでなく、カタの容姿や動き・リズム感などを加味して総合的に観るのだと言う。［新注］は、人によって力の差があるので矢は当るだけでよく、必ずしも貫通することにポイントを置くのではないとする。

［古注］は、Bを賦役の課し方と解き、「科」は貧富の差、仕事をこなす力の強弱の差ととる。［新注］は、Bの「為」力を接続詞‘因為（そのため）’とし、「科」は矢を射る時の個人の腕力の差ととる。

［古注］A［射S－<不>主V－皮O］S_1／B［為力S－<不>同V－科O］S_2＝C［古之道也］P　［AS_1／BS_2＝CP］の名詞述語文

［新注］［A射S－<不>主V－皮O／B<為>力S－<不>同V－科O］S＝C［古之道也］P　［（A／B）S＝CP］の名詞述語文

すっきりした構文になる［古注］に比べ、［新注］は語釈上も構文上もかなり回りくどく、こじつけている様子が伺える。

Ⅲ. 2　「奚其為為政」の解釈

或謂孔子曰、子奚不為政。／或ひと孔子に謂ひて曰く、子奚(なん)ぞ政を為さざると。子曰、書云、孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政。是亦為政也。奚其為為政。／子曰く、書に云ふ、「孝なるかな惟れ孝、兄弟に友に、有政に施(ほどこ)す」是れも亦政を為すなり。奚ぞ其れ政を為すことを為さんと。（為政第二）＜口訳＞ある人が孔先生に言った。先生はどうして実際政治に携わらないのですか。先生は言われた。『書経』に「孝なるかな孝、（よく親に仕え）、兄弟仲よくする。［これもまたりっぱに］政治に役立つと言っている。これもまた政治に携わることだ。どうして実際政治に携わることをしょうか。[17]

宮崎市定氏（以下M氏）は、本章句は自分の頭でよく読みとけない、それは原文がおかしいからで、「奚其為囚為政」と直すべきだと言う。[18]

孔子は或人に、どうして‘役人となって’実際政治に携わらないのですかと問われ、ふだん弟子たちを教育し、孝や友の徳目を世に広めている。これも立派に「為政」につながることで、いわば括弧つきではあるが政治に携わっていることになる。だからこと改めて役人になって実際政治に携わることなど考えていないと答えたのである。M氏の曲解は「為政を為さん」を「為政と為さん」と誤訓読したため、「どうしていまさら為政をしようか」を、「どうしてそれを政をしないといえようか」と平板に単純解釈しようとしたことに起因する。

M氏の提起する「新しい読み方」は、残念ながら全書を通じ30余章句が殆んどこの種誤訓誤読と断章取義に基く曲解によるものである。M氏は自分の理解力不足を棚に上げ、歴代の注釈家の無能力を詰るのであるが、根底に、自分は歴史学者でありその目で原文を正すことができるのだという‘自負’が横たわっているようだ。言語学の知識や能力に裏打ちされない、訓読法による強引な‘珍奇’な読み方など平にご免蒙りたいものである。

それにつけても、本章句の「施於有政」を「有政に施こす」と訓み上記の＜口訳＞のように誤訳する‘歴代の’注釈家の罪は重い。

「施」は、タイプ［TAR　TAT　TAN］、基本義［ウネウネと伸びる、伸ばす］を持つ、「移、蛇、帯、延、曳」等と単語家族をなす語である。[19] ここでは原義に立ち戻って、これを「有政に施(のびいた)る」と訓み、「実際政治に繋がるのだ」と解釈するのがベターだと思われる。

Ⅲ. 3　「吾不与祭如不祭」の文構造

祭如在、祭神如神在。子曰、吾不与祭如不祭（八佾第三）／祭ること在すが如くし、神を祭る

こと神在すが如くす。子曰く、吾祭りに与からざれば祭らざるが如しと。

前半の文構造は次のようになる。

［祭Ｓ－如Ｖ－在Ｏ］［(祭Ｖ－神Ｏ）Ｓ－如Ｖ－（神Ｓ－在ＶＰ）Ｏ］

〈口訳〉[20] 先祖のお祭りは（先祖が）そこにおられるようにし、（先祖以外の）神神のお祭りは神神がそこにおられるようにする。先生は言われた。「わたしはお祭りに参加しないとお祭りをしたような気がしない。(？？？)」

正常な日本語能力の持主ならば、後半の訳文が日本語の文章の態をなしていないことにすぐ気がつくだろう。「お祭りに参加しない」と「お祭りをしたような気がしない」とは同一内容ではないのか。それとも「もし」参加しないとお祭りをしたような気がしない「ので」、いつも参加することにするのだという意味なのか。

実は原文はそのどちらでもない。この誤訳は、原文を次のような構造に読解したために必然的に引き起された誤読現象なのである。

［(吾ｓ－＜不＞与ｖ－祭ｏ）Ｓ－如Ｖ－＜不＞祭Ｏ］

この構造で捉えた時の正訳は、「私が祭りに参加しないことは、祭らないのと同じだ」ということになり、自分が祭りにとっていかに大切な存在であるかを豪語した内容の文となる。「私が関与しない祭りは祭りとは言えない」ということになり、かねてどれほど傲慢な孔子と雖もこんな言辞を弄するとはとても思えないのである。

歴代の日中の注釈家達はこの句切りをそのまま伝えて何の疑問も起さず、そのまま訳すとトンチンカンな訳文になっても、まだその原因を探ろうとしないのである。

この構造は章句前半と同じく、次のように捉えねばならない。

［吾Ｓ－＜不＞与Ｖ－(祭ｓ－如ｖ－＜不＞祭ｏ）Ｏ］

「与」の語義、「如」の語義、全句の構造（Ｓ－Ｖ－Ｏの二重構造）を見直し、全文の整合性を求めて正解を導き出すべきであったのだ。

「私は祭ることが、（魂が入っていないため）祭らないのと同じであるような（おざなりな）やり方には与(くみ)しない。」とすれば、前半と文脈も齟齬を来すことはないし、このような正論を吐く孔子の評価も一段と上ること疑いなしである。

訓読法の最大の欠陥は、このように歴代の注釈家の訓読したものを理解することに精一杯なため自分の頭で考える余裕がなく、無批判に受け継いで行くところにある。一般大衆の間で、漢文の知識をあらあら伝達する役目は果せても、学問研究の場で科学的真理究明の手段とするのはすでに時代後れであると言わねばならない。

21世紀の社会はすべての学問分野におけると同様、古漢語の分野においても言語学の知識に基いた、語義と語音と語法を総合した正政法による読解を要請していると言えよう。

おわりに

Chúyè Zuò Gāo Shì
除夜作　　高　適

lǚguǎn hándēng dú bù mián,
旅　館　寒　灯　独　不　眠、　　旅館の寒灯　独り眠らず、
kèxīn héshì zhuǎn qīrán.
客　心　何　事　転　悽　然。　　客心　何事ぞ転た悽然。

gùxiāng jīnyè sī qiānlǐ,
故　郷　今　夜　思　千　里、　　故郷を今夜千里に思ふ、

shuāngbìn míngzhāo yòu yìnián.
霜　鬢　明　朝　又　一　年。　　霜鬢　明朝　又一年。

［詩形］七言絶句

［押韻］眠、然、年が下平１先の韻

［平仄式］［仄－平］型

●●○○●●◎

●○○●●○◎　　１・３字逆にして救拯
(○)　(●)

●○○●○○●　　１・３字逆にして救拯
(○)　(●)

○●○○●●◎　　１字目逆にして救拯せず（平：仄＝15：13）
(●)

第３句は、A「故郷今夜千里を思う」と訓み、「大晦日のこの夜、千里もはなれた故郷では旅先にある私のことを思っていることだろうなあ。」と解釈する異説がある。

例えばW氏はこの説を支持し次のように解説する。[21] ――後半は対句仕立ての構成です。第３句は、B「故郷今夜千里に思う」とも読むことができます。すると「大晦日のこの夜、千里もかなたの旅先にあって故郷のことを思っています」となるわけです。どちらでもよいのですが、故郷のことをストレートに思うよりは、「故郷今夜千里を思う」と訓読するほうが、望郷の念がより強く表現されます。

「どちらでもよい」などという自ら学者研究者の資格をかなぐり捨てた表現、何よりもセンスのない何の根拠もない虚偽に満ちた解説には辟易を通り越してあきれるばかりである。

A［故郷Ｓ－＜今夜＞思Ｖ－千里Ｏ］

B［故郷O_1／S_1・(我Ｓ)－＜今夜＞思Ｖ－千里O_2］

B′[(我S)－〈今夜〉思V－故郷O_1（於）千里O_2]

B″[(我S)－〈今夜〉〈千里〉思V－故郷O]

結句の副詞「又」を動詞にみたてて（例えば‘加’）、＊［霜鬢S－〈明朝〉又（加）V――一年O］[22] とすれば、3・4句を対句とみなして、A説が正解となる。しかし、ことはそう簡単ではない。前述した対句①②③条件は、あくまでその両句が対句であることを検証する際の証明用の事項であって、逆の適用は真ならずである。形式上、対句にみせかける為に‘似せて’並べてあるかも知れないからである。この場合がまさにそれで、意味上の「転」句の作り方及び平仄式に造句のポイントがあるのだ（既述）。

A説でとれば、自然や人間や動物を含めた総体としての「故郷」が、ここでは人間、――それも親族知人に限定された――がしんみり私を思うことになる。きりがないので挙例をやめるが、「千里」もあくまで‘千里’という長い距離を指すのであって、‘私’という人間を代称していると考えることはできない。故郷の人々が遥か旅先の（どこにいるかも分からない）自分のことを思いやっていると考えるのは「甘えの構造」以外の何物でもない。

N氏もA説を支持して上記の解釈をした上で次のような鑑賞文を綴っているが、視点の定まらない混乱した作文になっている。[23] ――これが典型的な唐人の望郷の情なのである。唐代では除夜には親類が集って、一晩中酒を飲み、歌い踊って新年を迎える風であったというから、ちょうどドイツのジルヴェスターと同様なにぎやかな除夜の過ごし方であったのだ。旅先のさむざむとした旅館でそのにぎやかでたのしい故郷の除夜を偲んで、孤愁を新たにしているのである（傍点筆者）。

「与」や「如」のように多様な語義と機能を持つ語はふだん見なれているだけに、‘一看就明白’とばかり多寡を括ってしまい、結果的に誤解の溝にはまり易い。語義と語法を分明にしても、それらが決定打となり得ず、更に高度な総合的知識と判断力が求められる場合もある。

子謂子貢曰、女与回や孰愈。対曰、賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。子曰、弗如也。吾与女弗如也。（公治長第五）／子、子貢に謂いて曰く、女（なんぢ）と回と孰（いず）れか愈（まさ）れると。対えて曰く、賜や何ぞ敢えて回を望まん。回や一を聞いて以て十を知る。賜や一を聞いて以て二を知るのみと。子曰く、如がざるなり。A吾と女と如かざるなり。B吾、女の如かずとするに与すと。

A［(吾〈与〉女）S－〈弗〉如VP〈也〉］

B［(吾S－与V－(女S－〈弗〉如VP）O〈也〉］

［古注］がBの「与」を「許」す義とするので一瞬戸惑うのだが、「与（くみ）す」（賛成する）ほどの意味にとれば、基本構造［S－V－O］に分析できることになる。「私はお前が及ばないとするのに賛成だよ」

文脈から言えばB説に分がありそうだが、孔子の‘聖性’を保持する為には通説とは逆にA説「わしもお前も（回には）及ばないよね」の方が勝れていよう。そもそもこの章句は、孔子様ともあろうお方が、弟子の一人に向かって、お前とあいつとはどっちが愈っているかなどと師としてあるまじき質問をしたところに誤釈が生じる最大の原因があったと言えなくもないのだ。紛糾する諸説の根源を追究すると、いずこにも「尊孔」の二文字がほの見えてくるのがミソである。

（注）

1．東京教育大学漢文学科主催の年次大会。

2．拙著『唐詩の解釈と鑑賞＆平仄式と対句法』近代文芸社1993。

3．古漢語語法を次の六大基本構造型に措定する。Ⅰ主述構造句［S－P］①名詞述語句②動詞述語句③形容詞述語句　Ⅱ動目構造句［S－V－O］Ⅲ多主語構造句［S_2・S_1－P］Ⅳ処動構造句［場所詞／時間詞S_2－V（存現動詞）－S_1（主体語）］

4．／『（続）校注唐詩解釈辞典［付］歴代詩』大修館書店1987／2001.

5．小川環樹『唐詩概説』岩波書店1958.

6．7．21．渡部英喜『漢詩の故里』／『漢詩歳時記』新潮選書1996／1992.

8．9．14．23．中野孝次『わたしの唐詩選』作品社2000.

10．『柳宗元全集』は、一作螃、池畔也とする。夜に舟を榜すという不自然さは解消されるが、5句との対で考えればやはり「榜」を多とする。

11．N氏は3・5句を次のように誤読している。

3．閑に農圃に依って隣（した）しみ

5．暁に耕して露草を翻（と）り

五言句は2・3と切れること、3・4句と5・6句は対句となること。それぞれ［（S）－V－O］構造、［（S）〈状〉VP／（S_2）－V－S_1］の存現文構造になっていることなどの初歩的事項を全くご存知ないようである。

12．「東坡曰く、…然其尾両句、雖不必亦可」王国安『柳宗元詩笺釈』上海古籍出版社1993.

13．石川忠久『王維』日本放送出版協会1990.

15．19．藤堂明保『漢字の語源研究』学灯社1964.

16．『言文対照論語』廣智書局出版.

17．20．『論語』角川書店1987.

18．宮崎市定著礪波護編『論語の新しい読み方』岩波現代文庫2000.

22．正しくは［霜鬢S－〈明朝〉〈又〉一年NP］の名詞述語文に分析すべきであろう。

（2001．10．21．記）